

東光原

熊本大学附属図書館報



Kumamoto University Library Bulletin, No.5, June 1993

目 次 シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介 4

重要文化財 阿蘇家文書（34巻36冊）

世界－書物－図書館

化学Jリーグキックオフ

サッカーボール状分子に関する論文数の推移

敬白 阿蘿大明神御寶前立願事 一可有御寄進阿蘿庄事 一可奉寄進以幸俊拜預所内所領一所事 一可奉寄進以幸俊拜預所内所領一所事 右志趣者、爲天下靜謐、四海泰平、兩□御息災延命、 <small>(足利直冬)</small> 殊兵衛佐殿御心中所願□就圓滿、次幸俊所望滿足、 息災安穩、壽□長遠之、所奉立願之狀如件、敬白、 <small>(命)</small> <small>(成)</small>	〔二〕 河尻幸俊願文 敬白 阿蘿大明神御寶前立願事 一可有御寄進阿蘿庄事 一可奉寄進以幸俊拜預所内所領一所事 一可奉寄進以幸俊拜預所内所領一所事 右志趣者、爲天下靜謐、四海泰平、兩□御息災延命、 <small>(足利直冬)</small> 殊兵衛佐殿御心中所願□就圓滿、次幸俊所望滿足、 息災安穩、壽□長遠之、所奉立願之狀如件、敬白、 <small>(命)</small> <small>(成)</small>
--	---

貞和五年九月廿日 肥後守幸俊

肥後守幸俊
(河尻)
(花押)



足利直冬の九州下向関係文書（阿蘇家文書より）本文に解説

シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介 4

重要文化財 阿蘇家文書（34巻36冊）

工 藤 敬 一

今回は、九州の觀応擾乱^{かんのうじょうらん}の発端となる足利直冬^{ただふゆ}の九州下向関係の史料 3 点を紹介する。

一般に足利尊氏と弟直義の対立抗争と理解されている貞和 5 年（1349）から文和元年（1352）にいたるいわゆる觀応の擾乱は、直接的には比較的守旧的な関東の有力武士を支持勢力とする足利直義と、畿内近国の新興武士の支持を得て、より伝統否定的な立場に立つ尊氏の執事高師直^{こうのしらち}の対立から始まる。尊氏は勢力維持のためには師直を支持せざるを得ず、尊氏・直義の兄弟の対立抗争となり、遂には師直・直義ともに命を失ない、実力的にはほとんど無力化していた南朝方が、一時は京都を回復するまでになったのであった。

直冬は尊氏の実子であったが、父にうとまれ不遇な少年時代を送った。直義はこれに同情し尊氏にとりなし、左兵衛佐^{さへようえのすけ}に補して大将として起用させ、さらに自分の養子とした。そして、貞和 5 年（1349）4 月、備中・備後・安芸・周防・長門・出雲・因幡・伯耆の八箇国^{ながとなんだい}の支配権をもつ長門探題に補し、備中鞆の浦に滞在させた。その後京都では直義と尊氏・師直の対立はいよいよ激化し、遂に直義の失脚となり、8 月末直冬も師直方の兵の襲撃を受ける。直冬は四国にのがれ、さらに九州に落ちる。直冬の九州下向を主導したのが肥後の有力武士河尻幸俊である。「大平記」によると 9 月 13 日に河尻幸俊の舟で肥後に落ちたという。ここに取りあげた史料〔三〕からも直冬の没落先が「肥後国河尻津」であったことが分る。

河尻氏は嶋嶶源氏の末裔といい、肥後国飽田郡河尻^{くにのごけにん}（現熊本市川尻町）を本貫とするいわゆる國御家人^{くにのみやこ}であり、鎌倉期に河尻大渡^{おうねたり}の地に寒巖義尹^{かんがんぎいん}が開いた大慈寺に寺地を寄進した河尻泰明は著名である。河尻氏は鎌倉中期以降、北条氏と密接な関係をもって抬頭し、南北朝期にも大むね武家方に属した。〔一〕の「肥後守」も菊池氏惣領の南朝方の肥後守に対抗して、直冬の承認を得て称したものであったろう。

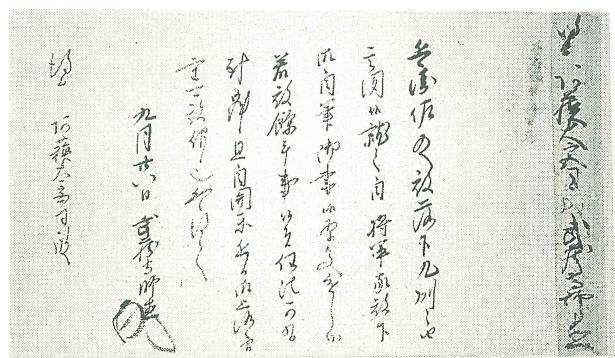
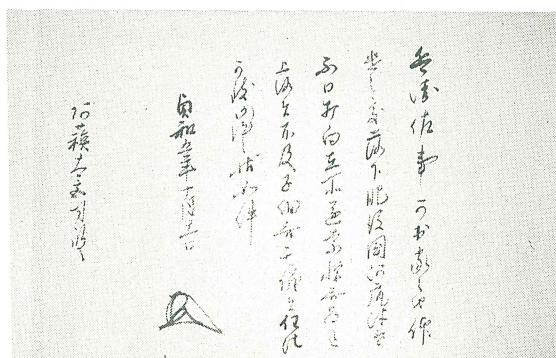
直冬は將軍の名代として下向したといって、しきりに九州の軍士を催し、9 月 18 日には阿蘇氏惣領の大宮司惟時もこれに応じた。直冬はこれを謝して 20 日

に阿蘇大明神に願文を捧げ、河尻幸俊もまた〔一〕の願文を奉納したのである。天下静謐・四海泰平、それに両殿（尊氏・直義）の息災延命、殊に直冬の所願成就と自分の所望満足・息災安穏・寿命長遠を立願の志趣としているが、直冬による阿蘇庄の寄進と自分の拜領分一所の寄進を約しているように、期待するところは直冬と自己の意図の達成（勢力伸長）である。立願の志趣にあえて「両殿」と記し、対立関係にある尊氏の息災延命も加えられているのは一見不思議に思われるが、將軍の名代を標榜して、九州武士の叫合を計ろうとする直冬の意図からすれば当然のことであったといえる。幸俊の願文は、このような直冬の目的にそういうものであった。本文書は立願文という性質からみて、幸俊の自筆である可能性が高い。下部に一部焼失があるので惜しまれる。

直冬の九州到着のニュースが伝わると、尊氏・師直は直ちにその追討を命ずる。〔二〕・〔三〕はともにそれを示す文書である。いずれも宛先は阿蘇大宮司惟時である。阿蘇氏は当時肥後最大の勢力であり、就中惟時はその惣領として、中央では南朝方、北朝方（尊氏派・直義派ともに）をとわず、きわめて高く評価されていたのである。〔二〕は師直が、直冬処分について、尊氏が関東から下した自筆状の案文（写し）を送る、もし手に余るようなら、法に任せて処置されたい（誅伐してよい）と惟時に命じたもので、近く関東から尊氏が上洛したらまた重ねて命令があるはずである、といっている。〔三〕は、その尊氏上洛後に出来られた御判御教書である。尊氏は直冬が出て上洛することを希望し、惟時の働きかけを期待していたのである。写真で分るように〔二〕・〔三〕は同筆であり、この間ずっと師直のもとに居た右筆^{ゆうひつ}の執筆であったと判断される。このことは、この間の直冬追討そのものが師直の意図にそったものであったことをはしなくも示しているように思われる。〔二〕にあえて尊氏自筆状の案文を送ると書いたのも、却って師直の策謀を示している感がある。実際直冬追捕の命令を受けた多くの武士達は容易にこれに従わず、逆に直冬の支持勢力は拡大していった。特に北部九州に大きな力をもつ少貳頼尚は、尊氏が九

州の総官として置いた九州探題一色範氏を目の上の瘤としていたので、これを好機として直冬方につき、さらに肥前の深堀氏や松浦党、肥後の詫磨氏など続々とこれに加わった。こうして九州は、直冬の九州下向に先立って肥後に入った征西將軍宮（懷良親王）を戴

く菊池氏を中心とする宮方、それに探題方、そして佐殿（直冬）方の三派てい立の独特的政治状況を迎える。（文学部教授 国史学）



〔二〕 高師直書狀

〔折封ウハ書〕
〔謹上 阿穂太宮司殿 武藏守師直〕

自 將軍家被下御自筆御書候、案文進之候、
兵衛佐殿被落下九州之由、其聞候、就之、

若被餘手事候者、任法可有計沙汰候、
且自關東近日御上洛之間、重可被仰候也、

恐々謹言、

〔貞和五年〕九月廿八日 武藏守師直
〔押〕

謹上 阿穂太宮司殿
〔大〕

〔三〕 將軍家 足利 尊氏 御判御教書

〔直冬〕 兵衛佐事、可出家之由仰遣之處、
落丁肥後國河尻津云々、

不日打向在所、遂素懷、無爲令上洛者、
不及子細、無其儀者、
任法可致沙汰之狀如件、

〔貞和五年十月十一日〕
〔花押〕

〔大〕
〔阿穂太宮司殿〕

世界－書物－図書館

井 原 健

神は自然・人間・聖書という三冊の書物を書いた、ということになっていたりする。これはつまりこの世は何でもかんでも本なんだと言い切っていることになる。聖書ならまだしも自然や人間まで〈書物〉というメタファーで括してしまうのは、一定の手順を踏んで読み解かれるという点では同じであると考えられていたからだ。それらを生み出すに当たって神が刻み込んでおいた書跡を苦労して解読し、わかる者にしかわからない真理を導き出すという共通の作業。自然〔世界〕（マクロコスモス）も人間（ミクロコスモス）もすべて書物のように読まれ、理解される。今となっては多少奇異に思える一方で思わずこのたとえに惹かれて

しまうところもあるのは、それが過去何百年もの間メタファーとして共有されていたという事実に現在のわれわれがもう取り戻すことのできないノスタルジックな喪失感を抱くからかも知れない。

歴史をさかのぼるとこういった考えはヨーロッパではかなり古くから存在する。特に世界=書物という〈リーベル・モンディ〉の観念は、ダンテ『神曲』中の「この宇宙に紙片のように散らばったものが愛によって一巻の書物に綴り合わされている」という言葉に代表されるように中世において一般的になり、「自然もしくは世界という書物を読むために、黄色くなった羊皮紙の埃を払った」ルネサンス以降も盛んに論じられる

ことになる。これまでダンテをはじめシェイクスピア、ゲーテ、ノヴァーリス、ジョイスなど数え切れないほどの人間がこういった〈世界という書物〉を夢見てきており、何かにつけて引き合いに出されるマラルメの「この世界のすべてのものは一冊の書物に帰着すべく存在している」という言葉も、世界そのものが解読されるべき一冊の〈大いなる書物〉であるというオルフィクなヴィジョンを反映している。劇場あるいは舞台にたとえられることもあるこの世界は一冊の書物として読んでいくこともできるのである。「世界はすべて、開かれた本である」（寺山修司）

この〈書物〉というメタファーを通して世界や人間を見る考え方の背後には、この世のすべてを見尽くしたい、それを整然と分類して世界を一冊の書物に取り込みたい、そういうそれ自体で完結した巨大ジオラマを完成させたいという強烈な欲望が隠されている。たとえば現在ほとんどの図書館で採用されているデューアイの図書10進分類法（1876）も同じような夢に憑かれている。たかだか100年ほどの歴史しかもないこのシステムは、10の〈類〉を同じく10の〈綱〉、〈目〉によってツリー状に枝分かれさせていき、最終的に1000の項目がこの世界全体を漏れなく覆い尽くすことを指す。それはまさに一冊の書物の内部が〈章〉や〈節〉によって細分化されているのと全くパラレルであると考えていい。余りに膨大な知識を一箇所に閉じ込めるためにはそれ相当の精緻な分類システムが必要になる。図書館の歴史というのは、いかに効率のよい分類手順でこの世のすべてを細分化できるか、どれだけ遺漏なく網の目を張り巡らせて世界を自らの中にまとめ込めるかの戦いの歴史もある。

したがって図書館もまた、世界と人間について書かれた巨大な一冊の書物と見なせるだろう。〈書物の書物〉あるいはメタ書物。それはボルヘスが「砂の本」と呼ぶ怪物、つまりごく普通の装丁をしていながら異常なほど重く、無限に増殖するページには初めもなければ終わりもない、各ページにはまったくでたらめな数字が打ってあり、一度開いたページは二度と目にすることができないような究極の書物に他ならない。『薔薇の名前』に描かれていたような、薄暗くてちょっとカビ臭い地下室の、床が抜けるほど積み上げられ、テーマ別に整理されたあやしくいかがわしいタイトルの中から、誰もまだ手にしたことのない本のページをめくる、そしてそのページは図書館という名のメタ書物のどこだかわからないある一部分に過ぎなくて、そこから先どこへ読み進んだらいいのか見当もつかない、下

手をするとどこかで行き倒れになってしまうかも知れないというラビリンス、それが図書館である。こうして〈世界=書物=図書館〉は三題晰よろしくメタフォリカルに結合する。

そしてそういう図書館の中を歩き回ることによってのみ真に空想的・幻想的・想像的なものが生み出される。いわゆる空想とか幻想というのは往々にして非現実的・非実用的な気まぐれのように捉えられがちだが、むしろ図書館に眠るテクストとテクストの間から、記号と記号の間から生まれる、それ自体一つの現実と考えていい。それだけでは断片的な情報をいかに反復・解体・連結させ、そこからどんな想像を生み出すか、そこにこそわれわれ〈デミ・ウルゴス（創造者）〉の本領が發揮される。「夢見るためには、目をつぶるのではなく、読まなければならない」（フーコー）役に立たない知識の死蔵された単なる保管庫ではなく、次々に幻想という現実を生み出す想像力空間と考えてこそ、語の本来の意味において〈ファンタスティックな〉一冊の書物として図書館を語ることができる。図書館は、「開かれ、目録に整理され、ばらばらに切りはなされ、くり返され、結びつけられて」その度にファンタスマゴリックな空間へと変貌する。

ブラッドベリーの『華氏451度』に描かれたような焚書は図書館からその本来の機能を奪ってしまう。ボルヘスが「図書館は、その正確な中心が任意の六角形であり、その円周には到達し得ない一個の球体である」と定義しているのを見ればわかるように、それはある意味では神を抹殺してしまうに等しい。われわれにとりあえず必要なのは、気が遠くなるほど膨大なページを備えた〈世界=書物=図書館〉の中を全力疾走で駆け抜けていくことである。

（教養部講師 英語学）

化学Jリーグキックオフ —サッカーボール状分子に関する論文数の推移—

1993年5月

藤 本 齊

私が、熊本大学に赴任してほぼ4年が過ぎようとしている。この間、附属図書館（本館）には、文献複写と会議にそれぞれ数度ずつ訪れただけである。こんな輩に図書館報の執筆というお鉢が回ってきたとは、皮肉な話である。そこで、図書館とは関係が薄いが最近化学の分野で起こった一大事件についてお話しする。1990年に単離された炭素の第3の同素体についてである。詳しい内容は、成書（最近、別冊化学で特集されている）にゆずるとして、今までの概略を簡単に紹介する。また、この発見に伴いこの分野での論文数の推移を見てみることにする。

炭素の同素体は、黒鉛（グラファイト）とダイヤモンドが古くから知られており、長い間これ以外には存在しないと信じられていた（アモルファス炭素は別として）。しかし、1970年に北海道大学の大沢映二助教授（現農橋技術科学大学教授）が炭素のみからなるサッカーボール状化合物の存在可能性を理論的に示した。サッカーボールは正20面体の全ての頂点を切り取った形をしており、五角形12個と六角形20個からなる多面体である。頂点は60個で、3本の辺によってお互いに結ばれている。したがって、全ての頂点に炭素原子を配し、二重結合1本と単結合2本を3つの辺に割り当てれば、炭素の原子価4を満足し、炭素のみからなる化合物ができる。炭素の第3の同素体であり、初めての分子状炭素である。しかし、この時点では実験的な証拠はいっさい無かった。

1980年代に入り質量分析の技術が発達し巨大分子の分析が可能になると、炭素蒸気中の化合物の分析が活発に行われ、1985年頃、炭素60個からなる化合物が安定に存在することが示された。60個以外にも70個のものなど隣接する炭素数の化合物に比べ比較的安定なものが見つかった。安定性の理由として分子構造が考えられるが、炭素60個の化合物についてさまざまな構造が理論的に検証され、サッカーボール状の構造が最も安定であることが示された。これ以外にも、いろいろな炭素数の籠状分子が調べられ、いくつか安定構造が提案された。これらの安定構造は、五角形と六角形のみからなる多面体であり、五角形が隣あわな

いなど共通の性質を持つ。この炭素のみからなる化合物群は、アルキメデスの多面体化合物などいろいろな名前で呼ばれていたが、現在は建築家R.Buckminster Fullerの名前にちなみフラー・レン類と呼ばれることが多い。特に、60個のものはbuckminsterfullerene（バッカミンスター・フラー・レン）と呼ばれることがある。これらフラー・レン類は、この時点では大量合成が不可能であり、単離ができなかったために構造決定にはいたらなかった。したがって、おもに理論面での研究が進んだが、実験面では質量分析による分解生成物および炭素分子の安定性について研究されたのみであった。

ところが1990年に希ガスのなかで炭素棒を加熱蒸発したスズの中から炭素60個の化合物が見つかり、単離・精製された。結晶構造も解析され、サッカーボール構造が確認された。こうして、大量に合成されるようになり、さまざまな方面で研究され論文数が激増した。サッカーボールばかりではなく、70個の炭素からなるラグビー・ボールやもっと炭素数の多いもの、チューブ状のものまで合成された。また、反応についても調べられ、多くの化合物や錯体が合成されている。なかでも、アルカリ金属との錯体は金属的性質を示し、さらに、1991年に超電導になることがわかったため、論文数の増加により一層拍車がかかった。1993年に入るとなぜか多少落ちついたものの、今後は反応の原料としてさまざまに使われるを考えられ、以前のような静かな状態には戻りそうもない。また、籠の中にさまざまな原

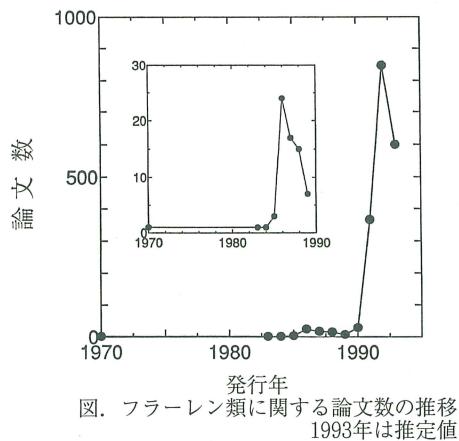


図. フラー・レン類に関する論文数の推移
1993年は推定値

子あるいは分子を取り込んだ化合物が考えられるが、実際にいくつか報告されており、特殊な環境下での原子・分子の挙動について関心が高まっている。

このようなフラーレン類に関する論文数の推移を図に示してみた。ひとつの発見とそれが論文数に与える影響を如実に現わしている。今年、サッカーのJリーグが開幕するが、化学においてリーグ戦はすでに3年ほど前にキックオフされている。

これは特殊な例であるが、このような文献数の変化は大なり小なりどの分野・領域にもあるものと思う。また、当然のことであるが、情報は蓄積するばかりで減ることはない。したがって、増加する情報をいかに交通整理するか、あるいは、蓄積した情報をいかに整頓するかが問題となる。今後ますますこの傾向が強くなり、大量の情報の中から自分に必要なもの、重要なものののみを取り出す能力が優秀な研究者の条件の一つになると思われる。

現在、研究者をとりまく情報収集に関する環境は

- ・教室の図書室にはある程度の雑誌が揃っている。
 - ・必要ならば学内外のほかの図書館（室）から郵便あるいはファクシミリで取り寄せられる。
 - ・Current Contentsなどのメディアを通して定期的に新しい情報が入手できる。
 - ・ゼロックスなどの乾式コピーが手軽に使える。
- など、児島先生が東光原第4号で書かれているように、書写・写真の頃に比べるとたいへん便利な状況にある。このような状況の中で、図書館がどうあるべきか？また、今後どのようなサービスが必要だろうか？を早急に考える必要がある。図書館が研究者にとって良きパートナーであり続けることを望む。

最後に、今回使用したフラーレンに関する論文リストを公開しようと思う。必要な方は連絡くだされば配布いたします。(ex3388またはE-mail address:fujimoto@higo.kumamoto-u.ac.jp)

(大学院自然科学研究科助手化学)

総合目録データベース実務研修報告

濱崎千雅

学術情報センター主催による“平成4年度第2回総合目録データベース実務研修”が11月16日から12月11日まで4週間にわたり実施されました。

研修の目的は、学術情報センターと接続している大学図書館において総合目録データベースの構築を推進するための指導と、地域での目録システム講習会での講師を養成すること等にあります。(地域講習会～目録システム講習会～は、熊本大学でも平成3年度より開催しています。)

総合目録データベースとは、図書及び学術雑誌をオンライン・ネットワーク方式により全国規模で構築しているデータベースのことです。これは、目録作成や検索に利用するだけではなく、文献複写・相互貸借もオンライン上でサービスが行われています。実務研修は、目録システムに関する知識取得の講義、班別のレポート作成、研修の目的でもある目録システム講習会用の講義要領作成、学術情報センターで同時期に開催された講習会で実際に講師役を務めること等を行いました。また、関連施設見学として、国立国会図書館、図書館流通センター（TRC）、東京工業大学附属図書館、東京大学総合図書館、早稲田大学図書館へ行きました。

した。図書館の新しいサービスであるOPACや、CD-ROM検索、光ファイリングシステム等の説明も受けすることが出来、大変参考になりました。その中でも、早稲田大学は直接学術情報センターとは関係ないシステムで動いており、新築早々の余裕のある建物や端末を羨ましく思いました。

今回の研修には、北海道大学から熊本大学まで16大学16名が集まり、4班に分かれて班毎にレポート作成・講義要領作成を行いました。各班、個別のテーマでレポートを作成するために、討議をしたのですが、作成が限られた期間であったために、完成されたレポートにならなかったのはとても残念です。私の班が選んだテーマは“遡及ノススメ”で、電算化以前の膨大な数になる蔵書の遡及入力について、情報交換を行いました。熊本大学では計画的な遡及入力を実施していないので、既に実施している他図書館での実情や問題点を聞く機会として、有意義であったと思います。

最後の週には、学術情報センターでの講習会の講師役を各班代表者が担当しました。私は講師担当ではなかったので、ずっと楽な立場であったにも関わらず、人に教えるという難しさを実感しました。研修へ参加す

る前はもっと簡単に考えていたので、このことを忘れずに、来年度の地域講習会に役立てていきたいと思います。

最初は長く思えた4週間でしたが、残してきた仕事を心配する暇もなく、無事に研修を終えることができ

ましたのは、学術情報センターの方々、研修員15名の方々のおかげと深く感謝しております。そして、熊本から東京までの距離をものとせず、電子メールで業務連絡ができたのも、学術情報センターの機能の一つだと改めて実感しました。

(医学部分館運用係)

平成4年度大型コレクション 収集計画決定 一文部省一

文部省は、国立大学の平成4年度大型コレクション収集計画を決定した。これは、文部省が、昭和53年以来、主として人文社会科学系の図書を対象に特別の予算措置を行っているもので、収集された図書は全国的な共同利用に供することを条件としている。今年度は外国図書が13件、1億4733万円、国内図書が4件、1178万円の総計17件、1億5911万円で以下の大学に配分される。

(外国図書)

19世紀のイギリス・アメリカ演劇コレクション（北海道大学）
中国古典戯曲小説資料（筑波大学）
音楽学位論文集（東京芸術大学）
障害児教育・米国学位論文集－研究文献コレクション（上越教育大学）
国際法研究文献コレクション（金沢大学）
アメリカ連邦最高裁判所：公判記録及び上訴趣意書全資料（京都大学）

K・ツヴァイゲルト教授旧蔵書（大阪大学）

ベルギー・オランダ経済史コレクション（神戸大学）

フランス法令集（島根大学）

清蒙古車王府戯曲本（山口大学）

アメリカ国務省外交文書（愛媛大学）

ドイツ社会学の系譜コレクション（九州大学）

海洋学術探検コレクション（鹿児島大学）

(国内図書)

物語文学資料集成（北海道教育大学）

有価証券報告書（弘前大学）

官報 明治編（群馬大学）

歌学資料集成（大分大学）

なお、昭和53年以降これまでに各国立大学に収集されたコレクションは、東京大学附属図書館の編集により平成3年11月発行された「全国国立大学所蔵大型コレクション総合目録（昭和53年度－平成2年度）」に収録されている。

第23回九州地区国立大学図書館協議会 及び第44回九州地区大学図書館協議会総会開催さる

「第23回九州地区国立大学図書館協議会」（熊本大学当番）は去る4月22日（木）メルパルク・熊本を会場に九州地区15国立大学41名の参加を得て開催された。議長には熊本大学黒羽附属図書館長が選出され、1) 国立大学における資料保存の対策について、2) 学術情報センター情報検索サービス（NACSIS-I R）からのILL申込機能（リクエストコマンド）の運用について、3) 電子化情報資料の収集・提供について、4) 遷及入力について、5) 学術雑誌目次データベース事業化計画について協議し、次期当番館に宮崎大学を選出した。

なお「第44回九州地区大学図書館協議会総会（熊本地区当番）は、翌4月23日、同・メルパルクにおいて開催、54大学122名の参加をえて、(1)「九州地区大学図書館協議会誌編集に関する内規」の改定

について(2)研修会経費の拡充について協議した。

また、オブザーバとして出席した宮崎公立大学を新規加盟館として承認し、加盟館は55館となった。



日誌(平成5.1.1~4.30)

- | | | | |
|------|------------|------|------------------------------|
| 1. 5 | 附属図書館係長会議 | 2.23 | 附属図書館委員会 |
| 1.12 | 古典籍研修会 | 3. 4 | 附属図書館係長会議 |
| 1.19 | 古典籍研修会 | 4. 6 | 電算機仕様策定委員会 |
| 1.26 | 古典籍研修会 | 4. 6 | 古典籍研修会 |
| 2. 2 | 古典籍研修会 | 4. 8 | 附属図書館係長会議 |
| 2. 4 | 附属図書館係長会議 | 4.19 | 電算機仕様策定委員会 |
| 2. 9 | 古典籍研修会 | 4.20 | 古典籍研修会 |
| 2.16 | 古典籍研修会 | 4.22 | 第23回九州地区国立大学
図書館協議会(本学当番) |
| 2.22 | 電算機仕様策定委員会 | | |

人事異動

採用

	氏名	旧	新
5. 4. 1	中尾 康朗		情報サービス課 閲覧係
タ	市花 恵津子		タ
タ	北里 多真美		医学部分館 整理係
タ	矢野 亜希子		タ 運用係

配置換

5. 4. 1	梅尾 勝征	情報サービス課 閲覧係長	情報管理課 受入係長
タ	福島 熟子	情報管理課 受入係長	薬学部 分館 閲覧係長
タ	飯田 典子	薬学部分館 図書係長	情報サービス課 閲覧係長
タ	山田 芳郎	医学部分館 整理係長	医学部分館 運用係長
タ	堀内 真也	医学部分館 運用係長	医学部分館 整理係長
5. 1	松藤 典生	情報管理課 目録係長	情報サービス課 学術雑誌係長
タ	浦田 博臣	情報サービス課 学術雑誌係長	医学部分館 整理係長

転出

5. 4. 1	大中 彰	情報サービス課 閲覧係	薬学部 庶務係
5. 1	堀内 真也	医学部分館 整理係長	大分医科大学教務部 図書課長
5. 1	安陪 光恭	情報サービス課 学術雑誌係	八代工業高等専門学校 庶務課 図書係長

転入

5. 5. 1	矢野 正博	大分医科大学教務部 図書課長	情報サービス課 長
タ	成田 和則	八代工業高等専門学校庶務課 図書係長	情報管理課 目録係長

病気休職

5. 4.19	二宮 累恭	情報サービス課 長	
---------	-------	-----------	--

退職

5. 2.28	中村 涼子	医学部分館 整理係	
3.31	大友 香華	情報サービス課 閲覧係	
タ	野田 時代	医学部分館 運用係	

○図書館委員の異動

平成5.3.31	任期満了	薬学部分館 長	國枝 武久
タ	タ	医療技術短期大学部	佛坂 博正
4. 1	就任	薬学部分館長(併任)	宮田 健
タ	タ	医療技術短期大学部(併任)	平山紀美子
5.15	任期満了	附属図書館 長	黒羽 啓明
5.16	就任	附属図書館長(併任)	植村啓治郎

東光原一熊本大学附属図書館報－第5号

平成5年7月

編集発行 熊本大学附属図書館

〒860 熊本市黒髪2丁目40番1号 096(344) 2111